

# 化石の保護、活用へ動き

夕日が地平を燃やす。ゴビ砂漠南東部のシャルツァフ。午後7時を回り、ベースキャンプに引き揚げてきた隊員が夕食の準備を急ぐ中、石垣忍岡山理科大学地球学部教授(62)は一人、高台にたえずんでいた。眼下の大地は赤く染まり、目を凝らすと規則的に並んだ影が浮かび上がる。「恐竜の足跡だよ。優に2万個は超えるかな」

日蒙共同調査3年目の1995年夏、シャルツァフで隊の車がオーバーヒートし立ち往生している間に偶然、大規模な足跡化石群を発見した。後の調査で、小型恐竜アピミムスが80頭以上の群れで横並びに走り一斉に方向転換したユニークな集団行動など、恐竜の生態に迫る新たな知見が得られている。

この地で今、化石の保護、活用に向けた新たなプロジェクトが動き始めている。モンゴル科学アカデミー古生物学地質学研究所(IPG)の音頭で地元ウムヌゴビ県や企業が出資し、周囲1・4kmにフェンスを巡らせ見学用のテラスや遊歩道を整備。今年6月から一般公開を始めたのだ。石垣教授は「まさに砂漠の博物館。夢が一つ、形になった」とまぶしげに目を細める。

## モデルケース

モンゴルは北米や中国と並ぶ恐竜化石の世界的産地だ



# ゴビに行く

岡山理科大 モンゴル恐竜調査

⑤ 夢



モンゴルでは恐竜化石の保護、活用も進む。シャルツァフの足跡化石群には遊歩道やテラスが設けられた

## 産地を「ジオパーク」に

が、調査が本格化したのは90年代初頭、民主化によって海外との学術連携が盛んになってからだ。「人々の恐竜への関心は低かった。研究が進み、母国の誇れる宝だ」という認識に変わりつつある」とIPGのツオクトバートル所長(58)がしみじみ語る。

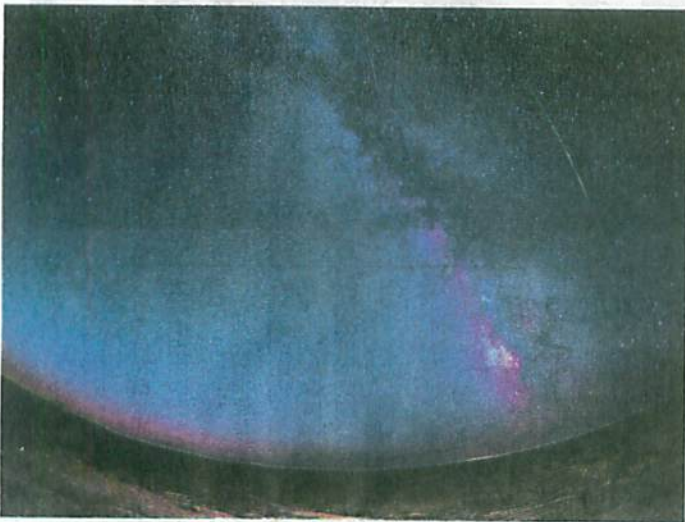
追い風も吹く。2014年12月には、シャルツァフを含むゴビ砂漠の恐竜化石産地13カ所が、世界遺産の暫定リストに記載された。さらにモンゴル政府は今春、恐竜化石の盗掘や違法売買の罰則を強化し、

追いついてきた。今年夏、IPGはウランバートル市内のショッピングモールで化石標本の展示を始めた。恐竜熱が高まる中、シャルツァフは化石保護、活用のモデルケースとして注目を集める。加えて南西約50kmにある直近の街ハンボグドは、莫大な銅と金を産出するオユトルゴイ鉱山が13年に操業して間い、労働者や観光客が急増中。ツオクトバートル所長が「マイ、ビッグドリーム」と言っているのは、「ハンボグドを掘り始めて8日目、ついに断念することが決まった。落胆する学生にベテランプレパレーター(化石技師)のウル

ジツルンさん(45)が声を掛ける。「よくあることだ。来年また一緒にチャレンジしよう」日が沈み、砂漠の夜にこぼれんばかりの星がきらめく。肉眼で天の川がくっきり見え、時季を迎えたベルセウス座流星群に隊員が願いを託した。「ここでの一日一日が全力だった。きつと忘れない」と記録係を務めた生物地球学部4年、川端凌市さん(23)。絶景をカメラに収めた。

8月20日、別れの朝だ。メンバーの一部が標本整理のためウランバートルに戻る。出発間際、コックのアマルザヤさん(32)が車に駆け寄り、タイヤに牛乳をかけた。長旅の無事を祈る、モンゴル流の掛けという。来夏の再会を誓い合い、太古の夢を追う旅は続く。(稲垣心也)

＝おわり



川端さんが撮影したゴビ砂漠の星空。天の川に沿うように、流星が降った